**聖霊降臨節第５主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年6月25日**

**「金や銀はないが」**

**出エジプト記3章14節**

 **3:14 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」**

**使徒言行録3章1～10節**

 **3:1 ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。**

 **3:2 すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。**

 **3:3 彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。**

 **3:4 ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。**

 **3:5 その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、**

 **3:6 ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」**

 **3:7 そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、**

 **3:8 躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。**

 **3:9 民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。**

 **3:10 彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。**

**一月ほど前でしょうか、雨が降る日に一人の中年の男性が牧師館を訪ねてきました。男性は「朝から何も食べていないのでお米をいただけませんか」と言いました。私は「生米をもらっても困るんじゃないですか」と言うと、男性は「炊飯器はあります」と言いました。さらに私は「近くにお住まいなのですか」と尋ねると「塩尻から来ました」と言いました。私は「この雨の中わざわざ塩尻から諏訪教会の牧師館まで歩いて来たのだろうか」といぶかしがる思いはありましたが、お米を少しとカップ麺など少しと教会の週報を袋に入れて差し上げました。私は「うちも裕福ではないのでこれだけしかあげられませんがすいません。ぜひ教会に来てください」と言いました。男性は「ありがとうございます。はい行きます」と言って袋を受け取り傘をさしてトボトボと歩いていきました。**

**この男性が日頃から物乞いをしているのかはわかりません。教会に行けば何とかしてくれるという安易な思いがあったのかもしれません。ただ、恥もプライドも捨てて物乞いせざるを得ない状況と言うのを考えますと何か哀しい思いがしました。「教会に来てください」に「はい」と答えていましたが恐らくは今のところはどこの教会にも行っていないと思います。けれども、決して裕福ではない牧師家庭を訪ねて親切をしてもらって「教会に来てください」と言われて週報を渡された、この事を通して男性がいつの日か何かを感じてもらえればと願っているのです。それはこの男性が本当に必要としているのはお米ではなくてイエス様との出会いでありイエス様の愛だということです。イエス様の愛によって生かされている、そのことにいつの日か気が付いて教会に繋がって欲しいなと願っています。**

**先ほど読んでいただいた新約聖書の個所では生まれつき足が不自由で神殿の「美しい門」のそばに運ばれて毎日物乞いをしている男性が出てきます。彼は少し先の4：22によりますと「40歳を過ぎていた」とあります。物乞いを始めたのが何歳からはわかりませんが、生まれつき足が不自由なわけですから、足が不自由で働くことができない男性にとって生きていくすべは物乞いしかなかったのです。毎日毎日来る日も来る日も神殿の「美しい門」のそばに運ばれてきて施しを乞うのです。その日一日なんとか生きていけるだけのお金や食べ物をもらって命を繋いでいく、それしかなかったのです。そしてこれからも恐らくその地上での命が終わりを迎える時まで男性は「美しい門」のそばで物乞いをして生きていかなければならなかったでしょう。**

**そんな彼が毎日毎日物乞いをしたのは「美しい門」のそばです。「美しい門」エルサレム神殿にある門はその名の通り金・銀・銅を使って非常に美しい装飾がなされていました。そのようなきらびやかな美しい門と貧しい身なりをして施しを乞う男性の姿、何か非常に正反対の姿ですが、それが毎日のことですのでそばを通るユダヤ人にとってはそれがもう当たり前の様子なのです。**

**そんないつものように施しを乞うていた男性のそばを、ペトロとヨハネが午後3時の祈りの時に通りかかったのです。男性はペトロとヨハネを見て施しを乞います。するとペトロとヨハネは彼をじっと見て言います。「私たちを見なさい」男性はこのように言われたことでいつも以上にたくさんもらえると思って二人を見つめました。すると、ペトロは「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(6節)と言って男性の手をとって立ち上がらせました。すると、なんと生まれてこの方立つことができなかった男性が立ち上がったのです。いや、それだけでなく歩き出したのです。歩き回り躍り回って神様を讃美をし、ペトロとヨハネと一緒に神殿の境内に入って行き祈りをささげたのです。神様を礼拝したのです。**

**生まれつき足が不自由な男性が、その不自由な足のために毎日物乞いをしていたけれども、ペトロとヨハネが語る言葉によって癒されて足が動くようになり歩けるようになった、そのようないわゆる奇跡物語です。私はこの奇跡物語が「美しい門」のそばで起きた出来事ということに大きな意味があると思います。**

**「美しい門」は先ほど申しましたようにエルサレム神殿にあるきれいな装飾をされた門です。ユダヤ人たちは毎日決まった時間になるとその門を通って神殿に入って祈りをささげて神様を礼拝します。生まれつき足に不自由な男性がそのような門のそばに置かれたのは、人通りが多く信心深い人たちが憐れみを持って施してくれるから他の場所で物乞いをするよりも効率良くお金がもらえるという単純な理由からだと思います。**

**しかし、決してそれだけではないと思うのです。それは男性がペトロとヨハネの言葉「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」この言葉を与えられ立ち上がることができたときまず何をしたかに注目したいのです。それは8節です。**

 **「躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。」**

**彼がまずしたこと、それは神様を讃美したのです。歩き回って踊りまわって神様を讃美し、ペトロとヨハネと一緒に神殿の境内に入り神様を礼拝したのです。今まで一度も入ったことのないエルサレム神殿に神様を礼拝するために讃美をしながら入って行ったのです。「美しい門」を通ってです。毎日毎日その傍らで物乞いをすることしかできなかったその門を通って自分の足で歩いて神様を讃美をし礼拝をしたのです。**

**もし彼が本当にただ単に効率がいいからと言う理由で「美しい門」のそばで物乞いをしていただけならば、自分の足で歩けるようになってまず神様を讃美をし礼拝をしたでしょうか。恐らくそうはしないでしょう。せっかく歩けるようになったのだから、もう物乞いはしなくて良くなったのだから、好きなところへ行ってそこで仕事をするなりして新しい生活を始めるでしょう。でも彼はそうしなかった。まず神様を讃美をし礼拝をした。他の何もしないで踊りまわって歩き回って神様を讃美をし、ペトロとヨハネの後についていてまず神様を礼拝しに行ったのです。それはやはり彼の中に神様に対して求める思いがもともとあったのでしょう。そうでないとわざわざ「美しい門」の傍らで物乞いをしないし、ましてや足が動くようになってすぐに神様を讃美をし礼拝をしないでしょう。**

**それはつまり彼が心の底から本当に必要としていたのは決してお金ではなくイエス・キリストだということです。イエス・キリストとの出会いであり、イエス様の愛です。イエス・キリストの名によって癒されて歩くことができるようになる、それはすなわちイエス様と出会いイエス様の愛のよって生かされていることに気づき信じて受け入れることで彼は喜びに包まれて神様を讃美をしまず神様を礼拝しに行ったのです。ペトロとヨハネはそのことに気づいていて彼にイエス様との出会いを与えて共に美しい門をくぐって礼拝に行ったのです。**

**「美しい門」それは私たちにおいて教会ではないかと思います。もちろん教会は金・銀・銅を使って美しい装飾がなされているわけではありません。むしろ金もなければ銀もありません。けれども教会にはイエス様がおられます。金や銀よりももっとすばらしいイエス様との出会いがここにはあり、十字架と復活のイエス様の愛が溢れているのです。私たち、そして全ての人が心の底で本当に必要としているイエス様の愛が教会にはたくさんあります。愛が、感謝が、讃美が、慰めが、希望がそして安心して生きていていいという平安が教会にはあるのです。だからこそ私たちは「教会に来てください」と言うことができるのです。「金や銀はないけどイエス様との出会いがありイエス様の愛が溢れる場所である教会に来てください。教会の門をくぐって中に入ってください。教会入門して下さい。」と言えるのです。**

**そして先に教会という門を入って、教会入門してイエス様と出会いイエス様の愛によって喜びのうちに生かされている私たちは、そこで満足して教会の中だけに留まってしまうのではなくて、ペトロとヨハネがイエス様の名によってイエス様の愛を伝えに行ったように、私たちも教会という門から外に出てイエス様の愛を伝えに行きたいと思うのです。**